二〇二三年一二月一日

裾分の奇形大根に大笑ひ　こすもす
藁苞に覗く深紅の寒牡丹　智恵子
白菜のお尻の並ぶ無人店　康　子
剪定に迷ひて鳴らす空鋏　澄　子
独り身のけふもあしたもおでんかな　たか子
夕日背に影絵のごとき枯木立　康　子

二〇二三年一一月三〇日

石蕗に寄せ草履揃へるにじり口　智恵子
角曲がるまで見送りぬ寒風裡　なつき

二〇二三年一一月二九日

三寒の風にも慣れて畑仕事　千　鶴
手を繋ぎ孫とかけつこ冬ぬくし　康　子
下戸なるも酔ひし気分に牡丹鍋　澄　子
雲あひにぽかりと現れし小春空　明日香
うたた寝の肩叩かれし炬燵かな　素　秀

二〇二三年一一月二八日

冬籠り十七文字をよるべとし　たか子
花鉢の混み合つてゐる縁小春　うつぎ
法事果て小春の縁にいとこ会　む　べ
影曳きて人と犬ゆく雪の路地　澄　子
養生の芝に降り積む落葉かな　なつき

二〇二三年一一月二七日

緋毛氈敷きしごとくに散紅葉　満　天
腕に寝る四千グラム日向ぼこ　豊　実

二〇二三年一一月二六日

叩かずに目こぼししたる冬の蝿　かえる
乗り遅れ待つも一会や冬満月　もとこ
橙に色差しきたる寒さかな　澄　子

二〇二三年一一月二五日

睦まじく寄り添ふ浮寝鳥の二羽　素　秀

毎日句会みのる選・二〇二三年一二月三日